様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成　２１年　　６月　　１日現在

研究種目：若手研究（スタートアップ）
研究期間：2007～2008
課題番号：19820032
研究課題名（和文）　一人称散文作品とその批評方法の探究――ミシェル・レリスの場合

研究課題名（英文）For the Prose Works in the First Person - In Case of Michel Leiris

研究代表者
谷口　亜沙子　（TANIGUCHI ASAKO）
獨協大学・外国語学部・専任講師
研究者番号：10453995

研究成果の概要：　フランスの詩人・民族詩学者ミシェル・レリス（1901-1990）の作品をいかに語りうるか、という問いに徹することにより、作者の一人称によって書かれた文学作品を批評する際の方法論を探求し、そのいくつかの実践例を発表した。具体的な成果としては、レリスの文学行為の中心概念にあたる「ゲームの規則」に関する新しい解釈を提出したこと、また、文学研究の場において手つかずのままであった『ドゴン族の秘密言語』の読解に着手したことなどがあげられる。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2007 年度	610,000	0	610,000
2008 年度	630,000	189,000	819,000
年度			
年度			
年度			
総　計	1,240,000	189,000	1,429,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ語系文学
キーワード：詩、文学理論、民族誌学

１．研究開始当初の背景

（１）文学研究の方法論

二十世紀は様々な文学理論が生み出され、批判と修正を繰り返しながら発展した時代である。だが、これらの理論や批評は、主に小説や詩、戯曲等のテクストを対象としてきていた。作者の一人称によるエッセイ的な散文は言ってみれば、読めさえすればわかるようなものとして扱われ、それに対する批評言語が特別に精錬されてくるということはなかった。だが近年、フランス内外を問わず、作者自身の一人称による散文作品は圧倒的な増加の現象をみせており、その形式や構造が多様化するとともに、フィクションとの新たな関係などの多くの問題を提起している。詩でもなく、小説でもなく、必ずしも自伝とも言えないこれらの作品は、どこにその発生の起源を持つのか、批評はそれらの作品の独自性をいかに捉え、いかに位置づけることができるのか。「無ジャンル」であることが、「現代的」な文学作品のきわだった特徴であることがすでにひとつの紋切り型となってきた現在、それに対する有効な批評言語がどのようなものでありうるのかをさぐることが本研究の目的である。

（２）ミシェル・レリスという作家

本質的には「詩人」と言われ、「詩人であること」こそをその生涯の野心としながらも、ミシェル・レリスは生涯、むしろ「散文」に

よる自己表現を行ってきた。初期の自伝的作品『成熟の年齢』や、それにつづく『ゲームの規則』第四巻は、言語と主体、エクリチュールと時間、記憶と自己等々、「書くこと」をめぐってのさまざまな問題が展開されている大作であるが、レリスの仕事はそうした文学作品だけにとどまらない。実質的な処女作である民族誌学の調査日誌『幻のアフリカ』や、死後に出版された『日記』など、自伝的作品へとつながる記述、職業的な民族誌学者としての憑依や仮面芸術についての研究や文学批評、美術批評など、きわめて多岐にわたっている。

二十世紀における無ジャンル的な作品、という問題を考えてみた場合、詩人・民族学者であったレリスの仕事はきわめて興味深いケースを示している、というのが本研究の着想のそもそもの出発点である。

（3）日本・フランスにおけるレリス

ミシェル・レリスの作品は、日本での知名度はまだそれほど高いとは言えないが、それでも、文学作品を中心に数多くの翻訳が存在している。また、フランスにおいては、すでに大作家の評価を得て久しい。とりわけ、近年のおいては、死後十年を経て、急速に読解と校訂の作業が進められ、教授資格試験のプログラムに組み込まれるなど、一般にも大家としての評価が定着してきている。マルグリット・デュラスやクロード・シモン、ミシェル・ビュトール、ルイ・ルネ＝デフォレなど、「作家に愛される作家」「玄人受けの作家」として知られていたレリスが、より広く読まれ、愛されるようになってきていると言える。

また、こうした近年のレリスへの注目の高まりの理由のひとつには、レリスの結んでいた交友関係の広さと多様性も関係している。とりわけ、アンドレ・ブルトン、ジョルジュ・バタイユ、ジャン・ポール・サルトルなどの互いに反目し合っていた知識人たちの共通の友人として常にレリスがいたということは、二十世紀におけるフランスの知的風土を再検討するために、ひとつの有効な手がかりを差し出しているだろう。

（4）本研究の位置づけ

本研究者は、これまで主にレリスの文学作品の詳細なテクスト読解を中心的な方法として研究を進めてきたが、その作業の中で確認することになったもっとも重要なことは、様々な分野の仕事を行ない、多様なテクストを産出したミシェル・レリスの中心にあったものが「詩（ポエジー）」であった、ということである。これは彼の民族誌学的な仕事においても基本的には変わらない。そのような視点から、2007～2008 年度にわたって行われた本研究では、とりわけレリスの民族誌学的テクストを読み込んできた。民族誌学と詩的作品あるいは自伝的作品がいかに交錯するのか、詩人でもあるミシェル・レリスの民族誌学的作品には、他の民族誌学者の仕事にはみられないどのような特質があるか。こうした問いについての研究は、まだきわめて数が少なかったためである。

２．研究の目的

本研究を導いているひとつの大きな目標、メタ目標とでもいうべきものは、これまでのレリス研究とは異なる水準に議論の場を切り開き、新たな「主題」だけではなく、そこに新たな「語り方」をも提案することである。一人称で書かれた文章について語る場合、いかにして作者の言葉をただ反復・整理するだけにとどまらず、彼には述べ得なかったことを述べうるのか、という問いが、その時単純だが困難な問いとして、だが、いかなる場合にも忘れてはいけない方法＝問いとしてそこにあるように思う。作者を裏切らず、テクストの声を正確に聞き取りながら、しかし作者本人には語りえなかったことを語ること、それが、本研究を総べる目的である。

３．研究の方法

（1）特長

文学研究としての本研究の方法（メソッド）の大きな特長は、その柔軟性にあると言うことができるだろう。作品の歴史的な背景や事実関係などを詳細にあとづけてゆく実証的方法、テクストを内在的に読み解いてゆく構造主義的方法、複数のテクストや作品に通底する作者の内的な必然性を浮かび上がらせるテーマ批評等、それらのどれをも先見的に排除せず、かつ、それらのどれをも特権的には運用しない方法である。なぜなら、テクストはそのたびに多様であり、また同じひとつのテクストにおいてさえ、多様な層があり、多様な捉え語があるためである。本研究はそれが我々をテクストにいっそう近づけるものである限りにおいて、すべての方法を有効なものとみなす。ただしその方法は常にテクストそのものから示唆されているものでなければいけない。

（2）傾向

本研究者には、最も自分にとって自然であり、慣れ親しんだ方法として、内在的で詳細なテクスト研究を選びとる傾向がある。したがって近年においては、むしろ背景となる時代の状況、同時代他作家との関係など、意識的に外在的なものへと目を向けるようにしている。レリスの詩作品や自伝作品でなく、民族誌学の仕事に目を向けるようになってきたのも、ひとつには、そのようにして自分自身の読み方に変革を与え、あらたな文脈を

持ち、あらたな読みの力を鍛えることを目的ともしていた。

４．研究成果

以下に、項目５にあげられた各発表論文に沿って、本研究の展開とその成果を述べる。

（１）« La découverte de la pseudo-règle du jeu », *Cahiers Leiris*. no 1.

レリスの代表的自伝作品『ゲームの規則』の四部作は、自分の一切を統べるある「黄金律」の発見をめぐって書き継がれた大部の自伝的作品だが、そのような「ゲームの規則＝黄金律」は、これまで、結局はレリスが発見できなかったものとみなされてきた。だが、「ゲームの規則」は、実は最終巻の最後から少し手前において密かに発見され、レリスはそれを秘儀的な手法によってそっと我々に提示しているのではないか、という仮説を検証した。

この論文は、2007 年 3 月に『フランス語フランス文学研究』第 90 号に発表された論文「ミシェル･レリス〈偽ゲームの規則〉の発見」をフランス語に直したものだが、さらに、2007 年 3 月刊行「早稲田フランス文学語学研究」第 26 号に発表された論文「ミシェル･レリスの〈新生〉――『フィブリーユ』におけるもうひとつの円環」の一部を関連させて発展している。

「ゲームの規則」というミシェル・レリスの鍵概念についての新解釈を提出するこの論文は、フランスにおけるミシェル・レリスの初めての単独研究誌 *Cahiers Leiris* 誌の第一号の巻頭論文に採用された。

（２）「〈民族誌的シュルレアリスム〉の窮状」

「民族誌学的シュルレアリスム」とは、1981 年にジェイムズ･クリフォードが発表した論考であり、二十世紀前半のフランスにおいて、アヴァンギャルドと民族誌学がどのように交差したかについての先駆的な仕事である。だが、1920 年代から 30 年代にかけて隣接して発展してきた民族誌学と〈シュルレアリスム〉との融合を表すために案出された「民族誌学的シュルレアリスム」という概念は、発表以来さまざまな批判と論争をまきおこしてきたものでもある。本論文は、とりわけ、フランスの民族誌学者であり、ミシェル・レリスの研究家でもあるジャン・ジャマンを代表とするフランス側からの批判を中心に、これまでの議論と主要な争点を概観し、その上で、この概念を有効に機能させるあらたな方法を提案したものである。とりわけ、クリフォードが「民族誌学的シュルレアリスム」の対概念である「シュルレアリスム的民族誌学」の代表例にミシェル・レリスの『幻のアフリカ』をあげているのに対し、その典型的かつ最上の例は、民族誌学者であり映画作家でもあるジャン・ルーシュによる一連の民族誌映画ではないかという視点を打ちだした。

『水声通信』第 20 号「思想史の中のシュルレアリスム」の特集の際にこの論文を執筆したことは、その後、本研究の方向性に新たな方向を与えてくれることになった。

（３）「『サンガのドゴン族の秘密言語』を読む――ミシェル・レリスと聖なる赤」

1931 年から 1933 年にかけて行われたダカール・ジブチ調査団に参加したミシェル・レリスは、このアフリカ横断旅行から三つの主要な著作を刊行している。『幻のアフリカ』、『サンガのドゴン族の秘密言語』と『ゴンダルのエチオピア人にみられる憑依とその演劇的諸相』である。この三作のうち、1938 年にパリ高等研究所に提出された学位論文『サンガのドゴン族の秘密言語』は、そのあまりの専門性の高さと一見したところのとっつきにくさのために、文学研究の場における言及がほぼ皆無に近い著作であった。

だが本研究は、この著作が書かれた時期が最初の自伝的作品『成熟の年齢』から『ゲームの規則』に取りかかるまでの過渡期であたっている点に注目し、とりわけその第一部を読み込むことによって、この仕事が、40 年以降のレリスを導く「聖なるもの」と「言語的転回」というふたつの大きな方向性を生み出すことになったという解釈を提示した。ドゴン族の秘密言語を記述する際、詩人レリスの特質はいかに現われているのか、ドゴン族の宇宙観は当時のレリスにいかなる作用を及ぼしていたのか。それらの跡付けを行う中で、とりわけ、ドゴン族の秘密詩における「赤」の意味作用が『ゲームの規則』第三巻の終末部における「赤」をめぐる謎めいた記述を読み解くための大きな鍵となりうるということを発見した。

（４）「『ミノトール』誌第 2 号の巻頭写真から――ダカール・ジブチ調査団とミシェル・レリス」

本論文は、（２）と（３）の仕事を行った際に、テーマの単一性や紙幅の関係上、取り扱うことができず、とりわけ魅力的と思われた問題を展開したものである。

民族誌学とアヴァンギャルドの交点にいたレリスがどのようにしてその独特なポジションを機能させていたか、本論文では、この問いを、レリスがアフリカ調査後に編集を引き受けた雑誌『ミノトール』の巻頭の一枚の写真から、そこに含まれた謎を解きあかすかたちで展開していったものである。ドゴン族の使用する「ひえのビールを発酵するため

の酵母の支持体」が、なぜフランスにおける輝かしい国家的大事業「ダカール・ジブチ調査団」の特集号の冒頭をかざる写真として選ばれねばならなかったのか。なぜ他の六千枚もの、もっとわかりやすい衝撃力を持ち、人目をひくエグゾティスムを帯びた写真ではなく、この一枚が選ばれているのか。本論文は、その理由を、当時まだ誕生して間もない民族誌学の抱えた特殊な事情に求めると同時に、『ミノトール』誌の編集責任者であったミシェル・レリス自身の必然性、すなわち彼が「ドゴン族の秘密言語」の調査を受け持った「民族誌学者」であり、同時に言語をいかに変質させるかという魔術的・錬金術的な作業に腐心した「詩人」であったという点に見出した。

（５）総括

これらの論文や研究を通して総合的に見えてきたものを一言で言うならば、それは、言語を常にボーダーレスに扱うことの必要性と有効性である。それが言葉で書かれたテクストである限りにおいて、詩であるとかエッセイであるとか、学術論文であるとかといった区分にとらわれる必要はない。『サンガのドゴン族の秘密言語』のような極端にテクニカルで難解にみえる著作であれ、一枚の写真につけられたさりげないキャプションであれ、構えを持たずにテクストと向き合えば、いつしかそこからミシェル・レリスという主体における内的必然性が浮かび上がってくる。それはまた同時に、それが言葉によって編まれたテクストである限りにおいて、常に同じ姿勢で同じ誠実さでエクリチュールの実践をおこなっていたレリスという作家の姿を確認することでもあった。

二十世紀におけるモダニズムの大きな特徴として、無ジャンルあるいは超ジャンル的であることがうたわれるようになって久しいが、ミシェル・レリスがそのような流れにおける先駆者のひとりであるとすれば、それはひとえに、彼の言葉への向き合い方、言葉との付き合い方のへだてのなさから生じた結果であろう。

文学研究、すなわち言葉によって言葉を研究する学問の場に身をおく私たちにとっても、また、日々言葉によって生き、言葉とともにある生活者としての私たちにとっても、その姿勢には多くの学ぶべきものがあるように思う。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　４　件）

１．　谷口亜沙子「『サンガのドゴン族の秘密言語』を読む――ミシェル・レリスと聖なる赤」、『フランス語フランス文学研究』、日本フランス語フランス文学会、査読有、第 93 号、2008 年、pp. 166-179。

２．　谷口亜沙子「『ミノトール誌』第 2 号の巻頭写真から――ダカール・ジブチ調査団とミシェル・レリス」、『早稲田大学文学部フランス文学論集』、査読無、第 15 号、2008 年、pp. 144-164。

３．　谷口亜沙子「〈民族誌的シュルレアリスム〉の窮状」、『水声通信』、査読無、第 20 号「思想史の中のシュルレアリスム」、2007 年、pp. 130-137。

４．　Asako Taniguchi, « La découverte de la pseudo-règle du jeu », *Cahiers Leiris*, 査読有、no.1, Jean-Sébastian Gallaire 編集、2007 年、pp. 22-42。

〔学会発表〕（計　２　件）

１. 谷口亜沙子、« Enseigner la littérature », 2008 年 5 月 24 日、青山学院大学。

谷口亜沙子「『サンガのドゴン族の秘密言語』を読む――1930 年代のミシェル・レリス」、日本フランス語フランス文学会秋季大会、2007 年、11 月 12 日、関西大学。

６．研究組織

(1)研究代表者

谷口　亜沙子（TANIGUCHI ASAKO）

獨協大学・外国語学部・専任講師

研究者番号：10453995

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし